

視覚障害者のレクリエーションに関する研究

永松 義博 (福岡県立久留米農芸高校)

色彩知覚、反響音、視知覚、感覚機能

1. はじめに

今日、社会福祉に対する社会的関心が高まり、身体的にハンディキャップを持った人々に対しての各種施設も整備され、具体的対応策も生まれつつある。しかし、視覚障害者にとっての配慮は、まだ完全とはいえず、又、これらに関する調査、研究も充分とはいええない。視覚障害者の生活行動の範囲は狭く、遊びの時間や種類、場所も極めて少なく、諸々の活動に制約を与えている。特に、全盲盲人や盲人女子にこの傾向が著しく、彼らの戸外での運動の時間は非常に少ない。身体的、精神的、社会的に、より多くの圧迫を受けているのが生活実情である。彼らにとって、戸外での遊び、運動、レクリエーション活動は、視知覚を発達させ感覚機能を向上させ、空間認知を広げ、環境とのコミュニケーションを成立させる意味からも重要な意義がある。本研究では、彼らにとって安全な運動の場の確保、快適に適應できる屋外遊び空間を提案することを目的としている。

2. 視覚障害者の知覚について

視覚障害者は、外部環境の把握、つまり、遠感覚を聴覚だけに頼り、近感覚を触覚と味覚で、近傍感覚を嗅覚で行なっている。視覚障害者にとっての遠感覚は、大きなハンディであり、そのハンディが生活面、身体面、運動能力、精神面に多大な影響を与えているといえる。つまり、視覚障害者は「視覚」に代わる他の器官の代用(聴覚、嗅覚、触覚、味覚への置換把握)によって、物や事象の理解としていくことになる。全体の形の認知、次に手ざわりの認知を繰り返し、構造形態、質感などを理解していくといえる。視覚障害者の環境知覚は、この様な手ざわりによる形や感触による支配と共に、色彩を連想による意識として理解したり(盲人の色彩知覚→青は水を表わしており、冷たい涼しい色、赤は火を表わしており、暖かい色)、又、周波数の高い音に選択的に注意を払うことによって、位置確認を得たりしている(反響音、足音)。こうした、盲人特有の知覚メカニズムとその特徴を、レクリエーション空間計画へ応用していくことが重要となってくる。

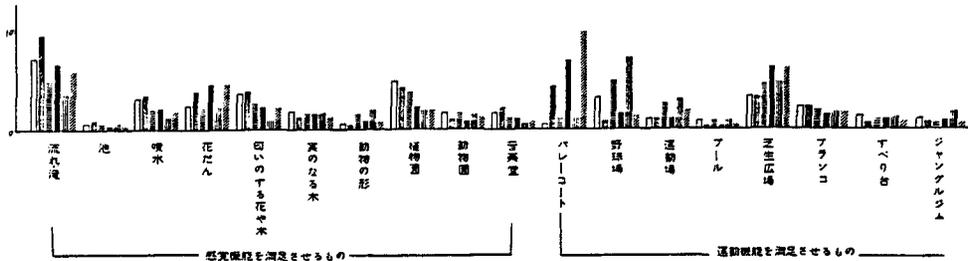
3. レクリエーション施設について

図-1は、盲学校生徒から盲老人を対象に、男女別、全盲者、準盲者、弱視者の別に、公園施設の要望を調査した結果である。内容を、感覚機能を満足させるもの、運動機能を満足させるもの、利用のしやすさの категорияに分類し、それぞれ障害等級別に特徴をみてみたものである。感覚機能を満たすものでは、流れ、滝、噴水といった聴覚的要素を利用した公園施設、又は嗅覚を活用する香りの高い花木類、植物園、散歩道等の施設への興味が高い。運動機能を満たすものでは、盲人男子が盲人野球施設、盲人女子が盲人バレー施設の希望が高く、その他、運動広場等の動的なスポーツ施設があげられている。このことは、特に弱視者に高い比率がみられており、全盲者では消極的な態度となっている。その他では、ブランコ、すべり台、タイヤの遊具等の遊戯施設があげられている。利用のしやすさでは、案内板、木陰、ベンチ、休憩所といった施設である。

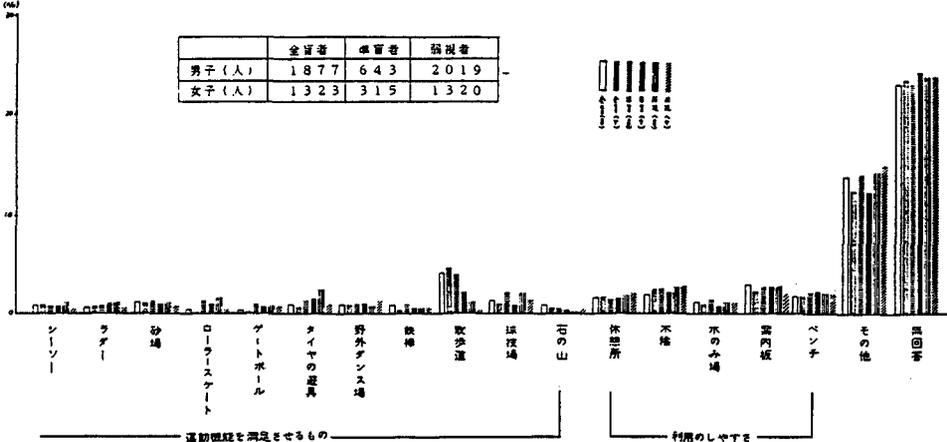
やすさでは、案内板、木陰、ベンチ、休憩所といった施設である。

4. 盲人公園について

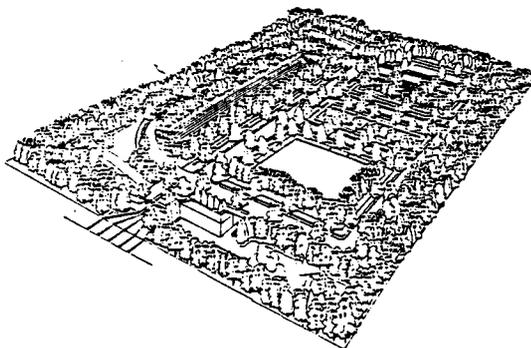
盲人公園の構想の要点は、①、視覚以外の要素である「聴覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」の感覚器官を活用し、総合的活用を図る。②、解説、案内、指示等は点字を用い、音、音楽、土地の起伏（傾斜）、色の強調等の活用を図る。③、歩行の手がかりを多く与える（特に触覚的情報は確実性が高く、又、20m前後で手がかりを与えることにより、安全かつ容易な歩行の確保を図る）。④、視覚障害者の心理、感覚、身体機能についてのデータを充分理解し、彼らの使用できる遊具を開発する。⑤、騒音のない静かな環境で、利用容易な位置を選定する。⑥、公園等は21～25mの区画単位で計画し、シンプルな形とし、輪郭（道エッジ等も含む）を強調する。又、スポーツ、レクリエーション施設の導入を図る。以上の特徴点の応用を計ったものである。



図一 公園をつくる時設けてほしいもの



	全盲者	準盲者	弱視者
男子(人)	1877	643	2019
女子(人)	1323	315	1320



盲人公園モデル

公園中央の水階段の音を手がかりとして誘導している。全体は直線主体の歩道であり、ランドマークを一定間隔に設置している。地形の変化を利用し、空間把握を容易にしている。